



《校訓》  
知性・創造  
鍊磨・友愛

2024年10月21日  
校長 田中 健二



年々秋が短くなっていると言われます。10月も下旬だというのに昼間の暑さはまだ残っています。それでも夕暮れはすいぶん早くなってきました。「読書の秋」ということで、皆さん、本に親しみましょう。

先日、関西大学で開催された「読書教養講座」という公開授業に参加してきました。著名な作家に来てもらい、作品にまつわる楽しい話を聞かしてもらう年に一回の催しです。今回が三度目の参加で、これまでに柚月裕子さん、桜木紫乃さんのお話を聞きました。一応抽選の形をとっていて、今回は人気作家の万城目学さんということで、落選の可能性もあるかと不安でしたが、無事当選のハガキが届きました。案の定会場は満席で、その人気の高さがうかがえます。

対談形式で始まった講演は、非常に興味深いものでした。小説を書こうと思ったきっかけは、大学三回の時に自転車に乗っていて、突然風に吹かれて、自分には何もないということに気づき、一年かけて小説を書きあげようと思ったこと。ニュースキャスターの有働さんとの対談で、一分一秒を争う現場で、世界の出来事と対峙しなければならない彼女と、作家としてほぼ一日の大半を机に向かって文章を書いている自分との、いわば生き方考え方の格差に愕然とした話。

また、来場者の質問に答える形で、小説の上達法は、とにかく書き続けること。自分の小説の書き方としては、ラストは完璧に決まっていて、そのラストに向けてどう伏線を張っていくかを考えてい。登場人物は自分の管理下に置かれているが、たまに自由に動き出す者もいて印象深い。どんな作品を書くにしても、つい変な話を入れたくなってしまう。テーマを考えて書き始めることは少なく、鹿がしゃべったら面白いだろうな（『あおによし鹿男』）とか、大阪城に男たちが集まつたら面白いかな（『プリンセストヨトミ』）など、ひらめきや楽しい想像などが書ききっかけになること。また、漫画と小説を比べるのはナンセンスで、どちらにもいい作品もあればそうでないものもある。ただし、漫画の方が小説の百倍も売れているので、ぜひ小説も買ってくださいと、作家ならではのお願いもありました。

残念ながら、少し前にコロナ罹患があり、講演後のサイン会は体調を考慮して中止となりましたが、とても楽しい90分でした。会場を後にする参加者の皆さんも満足げに講演の内容を振り返りながらキャンパスを歩いて駅に向かっていました。

ちなみに私が万城目さんの言葉で印象に残ったのは、「必要のない（相手が知らないであろう専門的な）カタカナ言葉を使う鈍感さ」と、「尊敬する作家は夏目漱石と中島敦で、共通点はどちらも漢籍に眼ざとく、抜群に文意がうまい」という二つです。

\* 保護者の皆様、足元の悪い中、体育大会のご観覧、本当にありがとうございました。続いて文化学習発表会が開催されます。保護者の皆様に観覧いただけるのは 10月31日の学年発表会となっております。ぜひ子どもたちの成果を見に来てください。

## 11月行事予定（保護者・生徒用）